
光の聖女と夜天の剣

H A L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の聖女と夜天の剣

【Nコード】

N0245BA

【作者名】

HAL

【あらすじ】

辺境の村に住む少年は退屈な毎日にどこか不満を感じていながら、ただ繰り返される平穏の中に身を置いていた。しかし、それは突然にあっさりと崩れ去り、運命が動き始める。始まりは、とある少女との出会いだった。

かつて神が創りし世界で、少年少女が織り成す王道ファンタジー。

プロローグ

悪い夢を見ているかのようだ。見上げた空は暗く、青空を隠す爆煙が立ち込めている。村のあちこちから火が燃え上がり、既に建物は全壊。ただ紅蓮の炎だけが存在し俺の周囲を囲んでいた。

どうしてこんなことに。

いつも通りの朝を迎え、普段と何ら変わらぬ日常が幕あけた日、だがそれは一瞬にして崩れ去った。

俺の暮らす村、アルカイト村は国境沿いにある小さな村だ。何の変哲もない、特筆すべき点もない村。何も変わらぬ日常がただ過ぎ行く、そんな村であつたが、俺は嫌いではなかった。決して不満がないわけではなかったが、それでも俺はアルカイト村で暮らすことを嫌だと思ったことはない。漠然と、このまま大人になって死んでゆく運命に疑問を感じていながら、俺の胸にあつたある種の危機感はいずれ忘れ去るものだと思っていた。

だがしかし、平穩の終わりは唐突に、俺の知らぬ所で始まっていたのだ。

最初の変化は誰かがあげた悲鳴だった。小さな村なので、その悲鳴は村中に響いて、次の瞬間には村人全員がハッキリと認識したと思う。空に浮かぶ人外存在を。

腕と翼が一体化した、俺よりも二周りは大きい体を持つ翼竜が俺たちを見下していた。翼が打つ風の音だけで縮み上がって動けなくなりそうな恐怖を感じたことは覚えている。だがそこから先はよく覚えていない。翼竜の一番近くにいた人が八つ裂きにされ、村は恐

怖のどん底に落ち混乱を極めた。我先にと逃げ惑う人たちは翼竜の放った火炎の息吹に焼かれ次々に死んでいき、村は静かになった。

そして今、俺の目の前に翼竜が羽ばたいている。ぎらつく紅い眼、血にまみれた牙と爪がつい先日まで俺と笑いあっていた人のものだと思うと余計に恐怖がわいてきた。

どうして俺が最後の一人になったのか、その理由はわからない。たぶん運が良かったのだろう、絶望に捕らわれ動けずにいた俺は結果的に最後まで生きている。そう、きつと生き残っているのは俺だけだ。悲鳴は絶え、村の入り口は激しく燃えている。何となくわかってしまったのだ、みんな殺されてしまったのだと。

だけど、俺の心は妙に落ち着いていた。体中の血を失い、思考が麻痺してきたのだろうか。待ち受ける死に対しての恐怖は当然ある。しかし、その確定してしまった未来を覆せないと知ったとき思った、これが死ぬことなのかと。例え生き延びたとしても、村を失い、あらゆる人間関係すらも断たれた俺に生きていく術などないのだからそれでもいいかと思えた。

翼竜がとうとう俺を殺すと決めたらしい。大きな口を開き丸呑みにせんと迫ってくるのを呆然と見ていた。ただ、最後に思ったのは、もう少し生きたかったなど。ホンの少しだけ願って目を閉じた。

そして、その願いは叶った。

いつまでも来ない衝撃を疑問に思い、目を開くと飛び込んできた光景に俺は言葉を失った。

目の前にあったのは翼竜の顎ではなかった。一人の女性が俺の目の前に立っていた。

金色の長い髪が背中を覆い、まるで自ら発光しているかのように輝いている。やわらかい、暖かな光がこの地獄のような場所に差し込んでいると感じた。その淡い金色をみたとき体中の痛みが消えたように俺の心は安らぎ、かろうじて保っていた意識を俺は手放した。そのとき、俺はそんな場合ではないというのに、その光をただ綺麗だなと思った。

暖かい光の中で俺はまどろんでいた。とても心地よい優しい光の中で、いつまでも醒めぬ夢の中にいるような感覚。だが、この世に永遠なんてあるはずもなく、俺は目を覚ました。

「うーん……。ここは一体……？」

周囲を見渡せば、ここはもはや黒こげて原型がわからなくなった

屋内だとわかる。その壁を背に俺は寝かされていた。一体何故？

そこまで考えて、記憶が一気に押し寄せてきた。そうだ、最後俺を助けてくれたのは一体誰なんだろう。ともかく状況を確認すべく立ち上がった俺は妙な違和感を感じた。

怪我が治っている？

騒ぎの中で負った怪我全てが傷跡一つ残さずに完治しているので、まさか本当に夢だったのではと一瞬考えもしたが、周囲の様子からそれは在りえないことだとわかっていた。そんな馬鹿なことを考えてしまった俺の耳に床の軋む音が届き、俺はその音源を見やった。

そこにいたのは、間違いなく俺を地獄と絶望から救い上げた人物だった。

歩くたびに揺れる長い金色の髪はとても美しく輝き、こちらを見据える蒼の色彩を宿す瞳はまるで至高の宝石のようだ。身に纏う純白の服には蒼のラインがあしらわれていて、なにやら神秘的な服装だ。そして、惜しげもなく晒された腕や脚は驚くほど白く澄んでいる。

その、美しすぎる姿に俺は数瞬、あるいは数秒絶句してしまい、なんとか意識を戻したときには彼女は俺の眼前にまで迫っていた。

「目が覚めた？どこかまだ怪我しているところは？」

紡がれた言葉を理解することは出来たのだが、余りにも現実とかけ離れた容姿の美少女に問われ、俺は恥ずかしながら言いよどんでしまう。

「え、いや、あの……。だ、大丈夫です」

情けない話だが、俺は女の子というものにほとんど耐性がない。失礼ながら、村の同年代の女の子達は幼少の頃から一緒に飛んだり跳ねたりして遊んでいたので、女の子と認識したことはなかった。だから、目の前に居るこの可憐な少女に対して、多少ドギマギしてしまうのは致し方ないのだと自分に言い訳していた。

「あ、頬にまだ切り傷があるわ」

「え……」

だから、そう言って手を近づけてくる彼女に反応できず。しかし俺は彼女が起こした現象を見て呆気にとられた。見たままの光景を言葉にするなら、彼女の指先が淡く輝き、その光に触れた傷が癒えたのだ。

「い、今のは……？」

驚きに言葉を取られ目を見開いた俺に、彼女は僅かに首を傾げてすぐに納得したような表情になった。

「ああ、魔法をみるのは初めて？」

「ま、まほ……？」

「魔法、よ。でも取り敢えず、その説明はあとでいいかな？」

初めて聞く言葉に興味を示した俺だが、確かに今重要なのはそんなことではない。彼女の意図するところも同じだろう。だから俺はまず簡潔に名乗ることにした。

「俺はレナス。レナス・アークスだ。レナスでいいよ。君は？」

「アイリよ。アイリ・セルナート。私もアイリでいいわ」

アイリ、アイリ・セルナート。それが俺の命の恩人の名前。胸の内で、心に刻み付けるように反芻して、改めてアイリと向き合う。

「ありがとう、アイリ。君のおかげで助かったよ」

心から感謝の気持ちを言葉に込めてそう伝えた。命の恩人である彼女に対する恩はそれだけで返せるものではないが、まずはそう言っ
て頭を下げた。

だが、顔を上げて様子を伺えば、アイリはその整った美顔を僅かに歪ませ、申し訳なげな表情を浮かべている。

「ごめんなさい。私には君にそんな風にお礼を言われる資格はないの」

「え？それはどういう……」

そして俺の脳は本日何度目とも知らぬ思考停止状態へと陥った。眼前の少女が発した言葉の意味を正確に判断することができない。あの、俺を襲った惨劇がアイリのせい？一体全体どういう意味なのか混乱しきる俺に、続けて言葉をかけるアイリ。

「あなたの村を襲ったあのワイバーン。私がちゃんと倒せなかったからこんなことに」

要領を得ない説明だと思った。あの翼の生えた竜がワイバーンと

いう名称であることくらいしかわからなかった。しかし、どうやらアイリ本人もなんと説明してよいのわからない様子で、決まりの悪い表情を浮かべるばかりだ。

「えっと。よくわからないんだけど」

「急にそんなこと言われてもわからないわよね。順番に説明するわ」

彼女が言うにはこういうことらしい。

まず、アイリはギルドっていう組織に属していてその仕事としてあのワイバーンを討伐する仕事をしていたらしい。それで、アルカイト村からは結構距離のある岩場で発見、そのまま倒そうと試みた。だが、その岩場が崩れやすい構造をしていたとかで戦闘の余波であつさり倒壊。それに気を取られている内にワイバーンに逃げられた。仕方がないので、何とか足跡を辿ったが、アルカイト村をアイリが認識したときには時既に遅し。それで何とか俺が食われる直前には間に合い今に至ると。

「本当にごめんなさい。私がちゃんと討伐できていれば」

彼女はそればかりを繰り返して自分を責めてばかりだ。確かに、間接的に彼女のせいと言えないこともないが、それは違うと思う。それに彼女は確かに俺の命は救ってくれたのだから、それを忘れて自己嫌悪するのはやっぱり間違いだ。だから俺は、それを彼女に伝えなくてはならない。

「そんなことないさ。アイリは何も悪くない。そんな風に自分を

責めるのは間違ってる」

アイリが澄んだ蒼の瞳を俺に向ける。

「俺の村をめちゃくちゃにしたのはあのモンスターだ。それは決してアイリのせいなんかじゃない。それに、俺はアイリに救われた。だから俺はこうして今確かに生きてる。君は自分の行為を悔やんじやダメだと思う」

「そう……かな？」

「ああ」

「そう、よね。ごめんなさい。ちょっと取り乱しちゃって」

そう言っで一応納得してくれたみたいで、完全には吹っ切れてはいないだろうがそれは仕方ないことだ。いくら気にするなどは言ってもこれだけの数の人が死んだのだ、気に病まない方がどうかしてる。

「だから、素直に受け取って欲しいんだ。俺のありがとうって言葉」

「うん」

アイリは笑顔で頷いてくれた。その太陽のような眩しい笑顔は俺が初めて見るアイリの笑った顔であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0245ba/>

光の聖女と夜天の剣

2011年12月31日16時59分発行